

# With コロナ時代の個人と社会の在り方を捉える性格特性尺度を創出 ～東洋的自己の哲学に基づくコロナ禍における「わたし」と「われわれ」の関係性の探究～

国立大学法人京都大学(総長:湊 長博/以下、京都大学)と日本電信電話株式会社(代表取締役社長:澤田 純/以下、NTT)は、with コロナ時代の新たな生活様式において人々が感じる孤独感・疎外感や帰属意識などの問題を個人とチーム・社会との関係性の観点から解明すべく、京都大学大学院文学研究科 出口康夫教授が提唱する「われわれとしての自己観」と NTT の個人特性計測技術に基づき、チームや社会に対する人の性格特性を測定する「Self-as-We 尺度」を開発し、公開しました。これは、2019年11月より進めてきました、テクノロジーの進化と人が調和する IOWN 時代の新たな世界観の構築に向けた両者の共創の最初の成果となります。

## 1. 背景

新型ウィルス感染拡大防止のためテレワークや遠隔授業など with コロナの新たな生活様式が広がる中で、孤独感や疎外感を感じたり、帰属意識の低下に伴う不安を訴える人が増加しています。また、帰属意識の高まりにより、極端に排外的な行動に走る人々も出てきています。このような外出自粛の状況下で、with コロナの社会やその先の IOWN 時代(※1)における人と社会のウェルビーイングを追求するうえで、どのような人がどのような要因で、with コロナの生活様式の中で孤独感、疎外感、帰属意識の問題を抱えているか明らかにすることが、喫緊の社会課題であると考えます。京都大学と NTT は、IOWN 構想を通じ、テクノロジーの進化と人が調和し、人が多様な価値観を自然に発揮できる包摂的な社会を実現するため、IOWN 時代の新たな世界観の構築を目指した文理融合型の共創を 2019年11月より進めています(※2)。

## 2. 成果の概要

With コロナの生活様式の下で、チーム(職場・学校など)や社会(地域や国など)といった集団とそれに属する個人の在り方が改めて問われており、それには自身が属する集団に対する行動・態度に関する性格特性が大きく影響していると考えられます。本研究では、職場や学校などの小規模のチーム(共通の目的を持つ数人～10人規模の集団)を対象として、チームに対する個人の性格特性の尺度の確立を目的としました。

チームに対する性格特性は文化による差が大きく、たとえば、西洋の個人主義的な考え方に則りチームを自律した人格の集合と捉えるか、東洋的な全体論的価値観によりチームと自己を重ね合わせて捉えるかにより、その人がチームに求めるものも大きく変わると考えられます。そこでまずは、日本を含む東アジア文化圏を対象として、京都大学大学院文学研究科 出口教授が提唱する、東アジアの全体論的自己の思想の流れを汲む「われわれとしての自己観」に基づき、チームに対する行動・態度を表す性格特性を尺度化することとしました。「われわれとしての自己観」は、チームなどで何らかの行為を共にする人々や、道具や環境などのあらゆる事物からなる系(「われわれ」)を一つの自己と捉え、その中の「わたし」は、そのほかの人や物と同じく、「われわれ」から行為の一部を委ねられている存在とする考え方です(図1)。

「われわれとしての自己観」に基づきチームに関する性格特性尺度を構築するために、まず提唱者

である出口教授と NTT 研究者のディスカッションを通して、ウェルビーイング研究等において NTT 研究所が培ってきた認知科学・社会心理学の知見に基づく個人特性計測技術を活用し、チームに対する行動・態度の観点から、「われわれとしての自己観」を2カテゴリ 11 種類の下位概念にまとめました。そして、それぞれの下位概念を各2問のアンケート質問項目に具体化し、合計 22 の質問からなる「Self-as-We 尺度」(表 1)を作成しました。この尺度では、「共同行為態度」のカテゴリの質問項目により、チームに対する回答者の行動・態度に関する性格特性が測定できます。また、「超越特性」のカテゴリは、チームへの行動・態度に影響を与える全般的な認知特性を測定するものです。次に、作成した尺度を用いて 500 名規模の質問紙調査を実施し、尺度の信頼性を確認しました。この調査により、チームに対する人の性格特性の大まかな傾向も見えてきました。共同行為態度に関する回答を分析したところ、「われわれ志向」「わたし志向」と呼べる性格特性の傾向が見られました。「われわれ志向」は、「わたし」の視点から見たチームなど「われわれ」のあり方に関するもので、チームに貢献し、チームの成功や失敗を自分事として捉える考え方の傾向です。「わたし志向」は、「われわれ」の視点から見た「わたし」を含むチームメンバーのあり方に関係し、自分はチームの意思に従わされていると感じたり、リーダーや明確な役割分担がなくても個々のメンバー任せればよいと考える傾向です。

また、様々な形態のチームにおいて調査を進め、今後の研究を加速するためには、「われわれとしての自己観」の継時的な変化や状況による変化を捉える簡易な測定手法も必要となります。そこで本研究プロジェクトでは、人と人の心理的な距離や結びつきの強さを評価する IOS (Inclusion of Other in the Self Scale) (※3)に倣った「関係性ピクトグラム」による測定手法の開発も進めています(図 2)。

なお、Self-as-We 尺度の詳細は、京都大学大学院文学研究科 哲学研究室が発行する紀要「PROSPECTUS」に掲載されており、どなたでも質問紙調査などに活用いただくことができます(※4)。

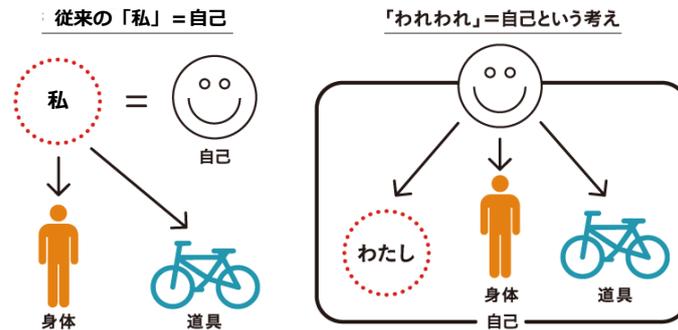


図 1. 従来の私中心の自己観と「われわれとしての自己観」の対比

自転車で出勤するという行為を考えた際、従来の自己観では、自己である私が、自分の身体や自転車を使役すると捉えます。一方、「われわれとしての自己観」では、「わたし」や、その身体、自転車、さらには道路やその管理をしてくれている人々など、出勤という行為を支える全ての人・物を含むシステムを「われわれ」=自己と捉え、「わたし」を含む「われわれ」の全ての要素は、自己から行為の一部を委ねられていると考えます。

表 1. Self-as-We 尺度

それぞれの質問に「とてもそう思う」～「全くそう思わない」の7段階で回答

下位概念	質問項目
<b>カテゴリ 1：共同行為態度</b>	
一体感	自分の属するチームが成功したときには、自分のこととして喜びを感じるほうだ。 自分の属するチームが失敗したときには、自分のことのようにショックを受けるほうだ。
連帯感	他のメンバーと意見が対立しても、チームの意見として尊重すべきだと思う。 チームメンバーには、積極的に活動に参加しない人がいてもよいと思う。
被委譲感	チームの一員は、一定の範囲の意思決定を任せられるべきだと思う。 チームの目標に対してどのように振舞うかは、チームの一員に委ねられるべきだと思う。
両動感	チームで意思決定をするときには、自らの意思に基づいて決める感覚と、チームの意思に従わせられている感覚の両方を同時に感じるほうだ。 チームの活動に参加するときには、自ら主体的に行動している感覚と、やらされている感覚の両方を同時に感じるほうだ。
全体性	チームの取り組みで得られた成果はチームの成果であって、誰か個人の貢献に還元できないところがあると思う。 チームの取り組みで起きた失敗はチームの過失であって、誰か個人の過失だとは言えないと思う。
脱中心性	リーダーが存在しなくても、チームはうまくまとまることがあると思う。 メンバーが協調するためには、必ずしも初めから役割を明確に決めておく必要はないと思う。
開放性	自分のチームの利益を超えて、他のチームや社会の役に立つような成果を出したいと思う。 チームが活動できるのは、チームの外の人々が支えてくれるお陰だと思う。
<b>カテゴリ 2：超越特性</b>	
超越的 一体感	身の回りの自然も、自分も同じ世界の一部であると感じる。 人類全体の幸福のために、自分も何かをすべきであるとを感じる。
平等的 連帯感	見ず知らずの他人でも、自分や身近な人と同じくらい大事に思う気持ちを持っている。 自分と直接かかわりが無い人でも、どこかでつながりを感じる。
運命 被委譲感	アイデアを思いつくとときには、自分の意思を超えた何かが降りてきたと感じる。 何かを書いたり作ったりしているときに、自分の意思を超えた何かに書かされている（作られている）という感覚がある。
生存両動感	自分は自身で生きているという感覚と同時に、自分以外の誰かや何かに生かされていると感じることがある。 自分の生き方は、自分自身だけでなく、過去や未来の人々とのつながりの中にある。

### 3. 成果のポイント

これまでも様々な性格特性の尺度が存在しましたが、本成果は、近現代社会の中で前提となってきた西洋的個人主義の考え方ではこぼれ落ちてしまう「わたし」と「われわれ」、即ち、「個人」と「チーム」に関する東洋的な感覚を掬い取り Self-as-We 尺度に組み込むことで、性格特性に新たな切

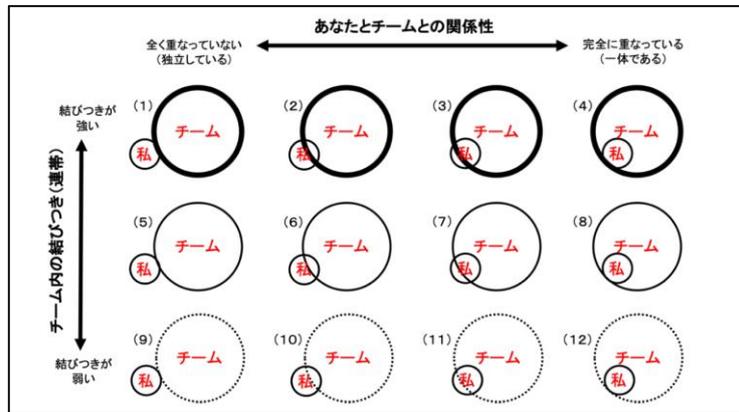


図 2. 関係性ピクトグラム

横軸「あなたとチームとの関係性」、縦軸「チーム内の結びつき」の観点で、チームに対するイメージを 12 枚の図から選択することで、Self-as-We 尺度を近似的に測定するものです。

リ口を与えるものです。

成果として、チームに対する性格特性には「われわれ志向」と「わたし志向」の傾向が存在することが判明しました。「われわれ志向」が強い人に対しては、テレワークや遠隔授業においてわれわれ性をより感じられるように、「わたし志向」が強い人に対しては両動感や被委譲感を新たな切り口とした対策が考えられます。

今回の質問紙調査は小規模なチームを前提に実施しましたが、Self-as-We 尺度は地域社会や国、人類全体などもっと大きな集団に対する個人の行動・態度に関する性格特性の測定にも使用することができます。その際には、見知らぬ人々や自然などとの超越的な一体感・連帯感などを表す「超越特性」が、分析のカギになってくると考えられます。社会に対する行動・態度に関わる性格特性を調べることで、たとえば、排外的行動などに至るような人と社会の関係における孤独感・疎外感や帰属意識の問題の要因の探究につながります。

#### 4. 京都大学・NTT の共創の今後について

今回の成果は、「われわれとしての自己観」を基盤として IOWN 時代の新たな世界観を構築する共創プロジェクトの第一歩として位置づけられます。今回の成果である Self-as-We 尺度により実証可能となった「われわれとしての自己観」をもとに、IOWN 構想における技術の進歩を前提条件として、人の様々な価値観(真・善・美)を見直す人文・社会科学的検討を進め、新たな世界観を共同で構築します。その成果を NTT の研究開発における技術課題の検討に反映することで、人や社会と調和した形でのテクノロジーの発展を促し、包摂的な社会の実現に貢献します(図 3)。西洋的個人主義とは一線を画した、東洋的な思想に則った独自性のある ICT 基盤の提供を通じて、グローバルな社会課題解決にも貢献して参ります。

※1 IOWN(アイオン: Innovative Optical & Wireless Network)は、スマートな世界を実現する、最先端の光関連技術および情報処理技術を活用した未来のコミュニケーション基盤です。

<https://www.rd.ntt/iown/>

※2 NTT 持株会社ニュースリリース「テクノロジーの進化と人が調和する、新たな世界観の構築に

向けて～IOWN 時代を支える生きがい・倫理・社会制度について、京大と NTT との共創を開始～」

<https://www.ntt.co.jp/news2019/1911/191113a.html>

※3 Aron, A., Aron, E. N. and Smollan, D. (1992). 'Inclusion of Other in the Self Scale and the structure of interpersonal closeness,' Journal of Personality and Social Psychology, 63 (4), 596-61

※4 京都大学文学部哲学研究室紀要 : PROSPECTUS, Vol.20

<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/254083>

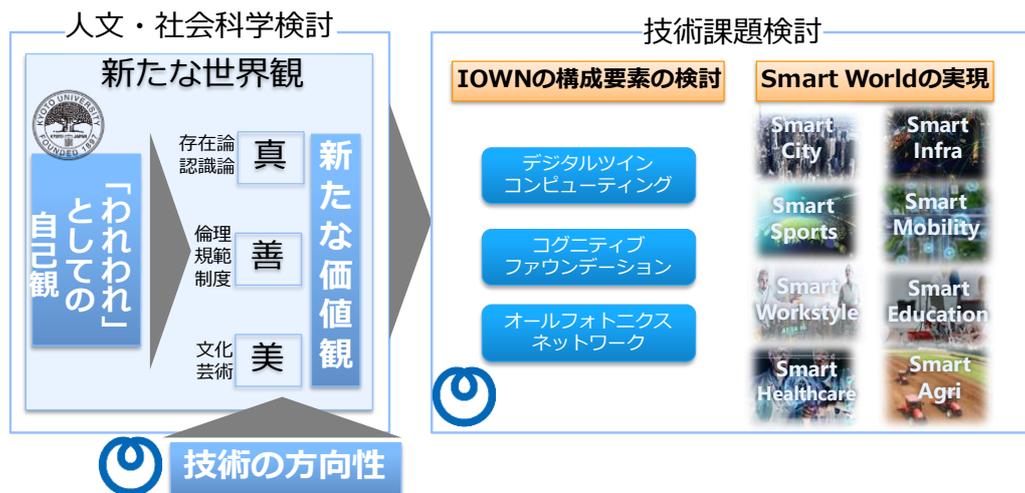


図 3. 京都大学と NTT の共創プロジェクトの全体像

「われわれとしての自己観」をベースに、IOWN 時代へ向けた今後の技術の方向性を踏まえ、真・善・美で表される人間の様々な価値観を見直し、新たな世界観を構築します。それに基づき IOWN 構想の技術課題検討を進めることで、包摂社会実現に資する情報社会基盤の実現を推進します。赤枠は本研究のプロジェクト全体の中でのカテゴリを示しており、その他の研究テーマについても今後、成果を発表していく予定です。